

あなたは愛を伝えるべきだ

作 鈴木 宏志

約一時間五十分

一稿（二〇二二年六月十一日～七月十二日）

キャスト 9人（男6、女3）

正岡子規（ノボさん）

正岡律（りつ。子規の妹）

正岡八重（やえ。子規の母）

夏目金之助（漱石）

米山保三郎（やすさぶろう）

おろく（長命寺 桜もち屋の娘） おろくの母親、二役

秋山真之（さねゆき。通称、淳さん。淳五郎）

高浜虚子（通称、きよし。後輩）

河東碧梧桐（へきごとう 本名は、へいごろう。後輩）

秋山「ノボさん。ノボさんはおらんかね」

やや遅れて反対側から高浜と河東が来る。

河東「見てみる、きよし。あれは淳さんではないか」

高浜「へいごろう、おまえの憧れる淳さんなら見間違ふこともあるまいな」

河東「ノボさんと同級の淳さんなら訊ねてくるのも不思議ではないだろ。しかし、大丈夫だろうか」

高浜「アシらはぐつと下の後輩だが、遊びに誘ってもらえるし。何と言っても、ノボさんは人気がある。そう怖じ気づくな、みつともないと笑われるぞ」

河東「何を言うか。ノボさんは、アシのことを笑ったりせんぞ」

高浜「それなら行くぞ」

小走りで近づいてから、それでも気後れする。

高浜「何だ、だらしが無いぞ。おまえが挨拶をしろ」

河東「そんな言い草があるか。あ、あの、す、すみません！」

秋山「何だ、おまえたちか。ノボさんの追っかけがまた増えたか」

河東「淳さん、しばらくです」

高浜「しばらくです」

秋山「おう、しばらくや。元気でやっていたか。おまえたち、ノボさんの追っかけもいいが、学問はしっかりやっているのか」

高浜「ぼちぼち、やっております。ノボさんは大学の予備門に入ったと聞いておりますが、その後はどうするんでしょうか」

秋山「むろん、大学を目指して試験を受ける。いくら成績優秀なノボさんとして、遊んでいてはさすがに厳しいだろう。そのところをよおく肝に銘じておかねばならぬ」

河東「はあ、それはよおくわかっておりますが、ノボさんは遊びも大事だと」

秋山「わっはっは。遊びと言いつつ、ノボさんの遊びは真剣だぞ。ところで、おまえたちも俳句の手ほどきを受けておるのか。五、七、五、の俳句だ。五、七、五」

高浜「はい。丁寧に俳句のイロハを教えてもらっています。まだまだ、月並み以下だと渋い顔をされますが。なあ、へいごろう」

河東「はい。俳句は、アシには、ちとばかし難しく。我ながら情けなくなります」

秋山「そうかそうか。ノボさんは、俳句に関していささか厳しいから。月並みばかり、ずらーっと並ぶんじゃない。たまには、べっぴんさんも拝みたくなるわ」

河東「あのう、淳さん。今日は何の用事でお訊ねに？」

秋山「ああ、それがよくわからん。とにかく来いと言うばかりで。使いの話では、ノボさ

ん、ニヤニヤしてたそうだ」

河東「ニヤニヤ、ですか？ なんだろうな」

高浜「しかし、ノボさんはいつだって楽しげだから」

秋山「そりゃあ、そうだな。べっぴんさんに会ってもニヤニヤしておる」

河東「はあ」

高浜「はあ。べっぴんさんに会っても、ニヤニヤはなかなかできませんね」

ふたたび玄関口から呼びかける秋山。

秋山「ノボさん、ノボさんはおらんかね」

家中探し回っていたような勢いの律が飛び出して来る。

律「はい、どちら様で。あ、秋山の淳さん。大変なんです、ノボさんが。ノボさんが。お

母さん、秋山の淳さんが見えになりました。お母さん、こっちです、玄関先です」

律と違って明るい八重が出てくる。

八重「ああ、いらつしやい。ノボさん？ ああ、ノボさんはちよつと姿が見えませんが。

あらあら、あなた方もいらしてくださいのね、ノボさんを探して、わざわざ」

秋山「探して？ おい、おまえたちは何か知っているのか」

高浜「いいえ、アシらは別に、ノボさんを探していたわけではないんです。なあ、そうだ

よな、へいごろう」

河東「はい。アシらは、ノボさんに呼ばれてこちらへ伺っただけなんです」

律「ほら、勘違いですよ、お母さんの。ごめんなさい、誤解なんです」

八重「あらあら、これは飛んだ早とちりで。ごめんなさいね、みなさん」

律「それより、どうしましょう、お母さん。ノボさんが、ノボさんが」

八重「いいじゃないの。ノボさんがみなさんと呼んだんだから。まあ、みなさん、どうぞ

お上がりになってください。お騒がせしてほんとうにごめんなさいね」

律「お母さんったら、そんなのんきなことを言って。ノボさんに何かあったらと思うと」

八重「律、あなたは心配しすぎ、騒ぎすぎですよ。ノボさんは、あなたの何なの？ 律、

あなたはノボさんの妹ってだけじゃないの」

律「そうですとも。ノボさんはわたしのお兄さんです。でも、あの身体では、どこかで行

き倒れていたらと思うと。お母さん、わたし、やっぱりその辺を探してきます」

律は八重に一礼し、それから秋山たちにも一礼すると、思いつめた顔で踵を返す。

そのとき、家の奥でガタガタと何かが崩れる物音がする。一様に驚く。

律「何ですか、いまの。すごい雷が落ちたような物音は」

秋山「さて。しかし、見に行ったほうがよからう。いや、待ちなさい。他に誰もいないと

すると、こいつはどこから忍び込んだ、怪しからん泥棒かもわからん。アシが確かめに行く。引っ捕らえてくるから、ここで待っていないさい」

律「は、はい」

秋山が入ったと思った途端に、がっぷり四つに組んだ子規の手でゆっくり押し出されてくる。

子規「わっはっは。まんまと引っ掛かりおったな。どうじゃ、押し出しでアシの勝ちだ」

秋山「うーむ、参った」

子規「不覚をとったな、淳さんよ」

秋山「ノボさん、あんたは大将だ」

子規「何と、大関ではなくて、大将か」

秋山「どうだ、大将。もう一丁やるか」

子規「やる！」

律「ノボさん！ いけません。お身体に障ります」

子規「おう、律。アシはまだ相撲を取れる。そう実感したぞ。しかも、淳さんに勝ってしまつた。たいしたもんだろ。わっはっは。アシは大将だ」

律「ノボさんが大将なら、わたしは大関です」

八重「ノボさん。あんたは一体どこへ隠れていたのかね」

子規「母上どの。アシは、なにも隠れていたわけではありません。物置に入っただけです。物静かに」

八重「物置で、物静かに？」

子規「騒いではいけません」

律「物置！ あんなホコリっぽいところで何をしてたんですか」

子規「道具がなくなつたんだ。はて、アシはこの家に帰ってきて、一体全体どこへ道具を片づけたんだつたか。東京から持ち帰った大事な道具だ」

律「あの道具は」

子規「うん、律、おまえは知っているのか。もしもわかっているのなら、どこへ片づけたか教えてくれ。アシはあのと意識が朦朧として、こう、頭がくらくらつとして、瞼は半分も開けられん状態だった。それで、律。あの大事な道具はどこへ片づけたんだつたか」

律「さあ、わたしもよく覚えていません」

子規「そんなはずはない。この家のことは、アシが東京に行くとき、律に任せた。母上どののことも、よろしく頼むと、アシは頭を下げた。それでいて、この家に持ち帰つた道具が行方不明。迷子の子猫ちゃんか。この家のことはすべて、律がわかつておらねばならん。それが道理というものだ」

律「道理とか難しいことはよくわかりません。とにかく覚えていないんです」

子規「そうか、それなら仕方がない。もう一度、あの物置に入って頭から埃をかぶるしかないな」

律「いけません、やめてください！」

子規はふざけて強行せんとする。律はそれを追いかけて叱る。追い駆けっこのように。

子規「アシは行くぞ」

律「やめてください！」

子規「わっはっは。アシは行くぞ」

八重「ノボさん。ちょっとちよっと、ノボさん」

子規「何ですか、母上どの」

八重「ノボさんのあの道具。見たことは見たんですが」

子規「やっぱり見たんですか。それで、どこで見たんですか。当然、覚えておいででしょうな」

八重「それがな。ノボさん。あのあと、ノボさんを無理やり、敷いた布団に寝かせて、医者を呼んだりいろいろあつて」

子規「その節は、大変ご迷惑をお掛けしました。母上どの、律、改めてお礼申し上げます。ありがとうございます」

八重「そんな御礼はいいんですが、あの道具。どこへ片づけたか、すっかり忘れてしまいました。申し訳ないのですが、律も同じようなものだど許してやってくださいな」

子規「いやはや、それとこれとは話が別です。アシもこの通り、すっかり元氣になりました。だからには今まで以上に学び、遊ばねばなりません。よって、あの道具の行方が知りたくてもたつてもいられないのです。あの道具がアシの命なんです」

律「あの道具が、ノボさんの命？」

子規「律、何か思い出してくれたか」

律「い、いえ。忘れたまま、一向に記憶が戻りません」

子規「そうか、それなら仕方あるまい。アシはふたたび物置を探してくる」

子規が背を見せるも、周囲は止めるに止められない。

律「あ、あの。ノボさん」

子規「なんじゃ。アシは忙しいのだ」

律「あの道具、ノボさんが東京から持ち帰った道具ならわたしも一度は見ています。ですから、わたしでも探せます。ノボさんの代わりにわたしが探します。ですから、ノボさんは横になって休んでいてください」

子規「そうか、それはありがたい。よし、律、アシも一緒に探そう。なんだか、幼いころの遊びみたいで嬉しくなるなあ」

律「あ、いえ、探すのはわたしひとりで充分です。狭い家ですから。隠し場所も自ずと限られてきます」

子規「え？ 隠すだって？」

律「仕舞い込んだ場所です。お待ちください」

子規「しかしなあ、律」

八重「ノボさん、あなたにはお客様がたくさんお見えですよ。お相手をしていただかないと、みなさんに失礼ではございませんか」

子規「え、なに？ それはいかん。アシとしたことが何たる失態。ああ、これからその原っぱで遊ぼうと思うて呼びだしたんだが。何しろあの道具がなくて、面白味が伝わるかどうか。いやいや、やっぱり無理だな」

秋山「いったい何をして遊ぶんだい、ノボさん。昔ながらの相撲でも充分面白いと思うんだが」

子規「それも悪くないが、アシは、東京で覚えた遊びをみんなにも教えたいと意気込んで帰ってきたんだ。いいか、きよし、へいごろう。手のひらに丸い球を握る。その球を遠くへ投げる。飛んできた球をできるだけ落とさず、空中でしっかり受け止める。そしてその球を敵は棒切れを振って打ち返す。打った球がふたたび返ってくるまでの間を盗んで、ひたすら走る。どうだ、面白いだろ。やってみたくなかっただろ」

律「ノボさん、まさかその身体で、投げたり、打ったり、走ったり、する気ですか」

子規「何だ、律、まだいたのか。早く探してくれ。そうでないと、アシ自ら探しに行くぞ。みんなを待たせるのは申し訳ないからな」

律「ノボさん、その身体では無理です。ご自分を労ってください。お願いです、ノボさん。お願いですから」

子規はしみじみと己の身体を見やる。頭を触り、腹を撫で、丁寧に点検する。

子規「よおくわかった、律。アシは走ったりするのはやめた。無謀すぎることはしない。

アシは指導する立場で、眺めて、大きな声を張り上げることなく、小さな声で応援する。アシは約束するぞ、律、母上どの」

律「ノボさん。兄さんは身体を休めて病気を治すんだよ」

子規「治るかな、アシのこの病気は。アシは赤い血を吐いて、ホトトギスになってしまった。赤いくちばしは、口から血を吐いたアシと同じ色をしている。だからアシは、冗談抜きでホトトギスになってしまった。そうだな、律。そうですね、母上どの」

律「ノボさんは鳥ではありません」

子規「鳥は鳥でも、ちりとりでない。アシはホトトギスになってしまった」

律「ホトトギスのくちばしが赤いなんて、わたしは知りません」

子規「いいや。アシは、ついこないだからホトトギスとして生きているのだ」

律「ノボさん」

子規「アシは生きているのだ」

八重「律、あの道具を今すぐ探してきてあげなさい。ノボさんは覚悟を決めて、生きようとしているんだから、どんなに反対したって聞く耳持たないんだよ」

子規「さすが、母上どの」

律「わかりました、お母さん。ノボさん、ちょっとだけ待っててくださいね」

律は子規を見つめて、それから彼の友人らにそれぞれ辞儀をして家の中へ消える。探す振りをしてあちこち彷徨くが、実際は隠し場所を心得ている。

そして、向こうから。駆け寄らずに。

律「あ、見つかりました。見つかりましたよ、ノボさん。丁寧に風呂敷でくるまれています。ノボさんは几帳面な性格で、ものを大事にする人ですからね。ノボさん、大事な道具はちゃんとしまつてありました。物置ではなく、わたしとお母さんの寢床です。ノボさん、見つかりました」

子規「そんなところにアシは入れない」

秋山、高浜、遅れて河東が歓声を上げ、飛び上がる。

秋山「よかったなあ、ノボさん」

子規「何か、すまん、淳さん。きよしも、へいごろうも。はしやぎすぎて、すまん。ほんとうにいい妹なんだが。おおい、律。おまえは、子どもがかくれんぼとか、鬼ごっこをしてるんじゃないぞ。早くこっちへ持つてこい」

律「はい、いま行きます。なんだか、わたし、汗が臉を濡らして、周りの景色が湖面のようにゆらゆら揺れて立っているのがようやくなんです。少しのあいだ、しゃがんでいます。ホトトギスさんは逃げないで、気長に待っていると思います」

律はしやがみ込んで、声を押し殺しながら全身で泣く。

子規「アシはホトトギスになってしまった。アシは気長に待っているぞ。気長に病と付き合い、合い、気長に生きるぞ」

●2場

原っぱ。

子規を中心に、秋山、高浜、河東が輪になっている。そこから思い思いに動いていき、野球チームの形を成す。

道具は、棒切れを磨いたようなバット。白球が数個。布きれでつくったようなグローブ。

子規「これからアシが君たちに講義するのはアメリカ生まれのベースボールという名前のスポーツだ。英語だけど、よく覚えておくように」

河東「英語ですか。どうも、アシは英語が苦手で、なんともなりません」

高浜「アシも発音が悪いと、毎度毎度、先生から叱られます」

子規「ほう、みんな英語にはかなり手こずっているようだな」

河東「先生の発音も毎回違って聞こえます」

子規「感心できんな、それは」

高浜「誰かい先生はおりませんか」

子規「アシの友だちがいいだろう。しかし、その話はこの次だ」

秋山「ベース、なんとか、という言葉は、つまり、文字の綴りはどう書くんだ？」

子規「文字の綴りとは、つまり、スペルのことかな。スペリング。スペル」

河東「滑る、ですか？ 真冬に張った氷の上で、滑る。おととと、滑る、と危ないです」

高浜「この馬鹿。すってんころりん、の滑るじゃなくて、スペルだ。スペリング」

河東「待て待て、きよし。急かすな。頭が混乱してきたぞ。ああ、それは英語じゃないか、もしかして」

高浜「もしかしなくても、英語だ」

河東「空威張りはするな、きよし。その、綴りは、スペルはどう書くんだ？」

高浜「それは、つまり。これからノボさんが教えてくれる手筈になっておる」

秋山「わっはっは。おまえたちはなんでもかんでも、ノボさん頼みという癖が抜けないんだな」

高浜「ノボさんは秀才ですから」

河東「すんなり答えが出て来ます。そうですね、淳さん」

秋山「さて、ノボさんはどう出るかな」

子規「アシは見た。ほんとうの秀才を。英語は夏目君に訊ねるのがいちばんだ」

秋山「夏目君というのは、ノボさんにうなぎをご馳走してくれた東京のお人か」

子規「いや、うなぎはご馳走になったんじゃない」

秋山「英語を教えてもらったお礼と違うんだ？」

子規「アシと夏目君の友情のしるしに、うなぎを注文したんだ」

三人は、眩しいものでも見るように、「ほおー」と呻る。

子規「夏目君の発音はとつてもきれいなんだ。スペルは、ビー、エー、エス、イー、ベース。ビー、エー、エル、エル、ボール、だったかな」

秋山「おまえたち、いいか、覚えてか」

河東「わああ、待ってください」

高浜と河東は必死に覚えようとする。繰り返し声に出し、字面に石で書く。

子規「ああ、待て待て。アシが間違っていたら大変だ。覚え直しは相当苦勞するぞ。悪いことは言わん、覚えるのは後にしておくがよかろう。とりあえずベースボールというスポーツのルールを説明しよう。ルールとはすなわち規則だ」

高浜はまたぞろ字面に書こうとするが、子規は咎めない。

子規はグローブを順番に配っていく。

子規「これを左手にはめて、飛んでくるボールをキャッチすると、まるで痛くない。キャッチだ。キャッチ」

秋山「キャッチか。よし、ボールを投げてくれ」

子規「投げるは、スロー。よし、淳さん、悪いが遠くへ離れてくれ」

秋山は軽く走る。

秋山「よし、投げてくれ」

子規「ボールの行方をよく見るんだ」

子規は高くボールを放ってやる。

秋山「よおし、こつちだこつちだ」

秋山は難なくキャッチする。

子規「淳さん、ナイスキャッチ。アウトだ」

秋山「アウトっていうのはなんだ？」

子規「ああ、そうか、わからないんだったな。よし、わかりやすくするためにチームを作ろう。人数が足りないが、守りが三人、攻めが一人でいこう。へきごろうは、ピッチャーだ。マウンドに立て」

河東「うわ、いきなり大役が舞い込んできた」

高浜「大役かどうか、どこでわかるんだ？」

河東「うん、ピッチャーという言葉の持つ響きだな。アシには、それくらいしかわからん」

子規は目標を決め、その地点まで小走りになる。

子規「マウンドはここだ。ここだぞ、おーい」

河東はマウンドに立つと、子規を真似て投げる格好をする。

子規は元の位置に引き返し、しゃがむ。

子規「アシはキャッチャーだ。へいごろうの投げるボールを受け止める」

秋山は高浜に近寄り、

秋山「見ろよ、あのノボさんを」

高浜「え、なんですか」

秋山「あの座りかたは、相撲や剣道の蹲踞（そんきよ）そっくりそのままじゃないか。ノボさん、英語だ、ベースボールだと言ってるけど、心は日本人のまんまだ。アシらと何ら変わらぬ、この国を愛している男の顔だ。そうだろ？」

高浜「はい、そうですね。なんだか、淳さんが、嬉しそうで、こつちまでわくわくしてきます」

子規は河東に投球モーションを指導する。

河東「そのふたり、私語は禁止！ だそうです」

高浜「なんだと。へいごろう、偉そうな口を利くな」

河東「アシがしゃべっているが、アシの言葉ではありません。ノボさんの伝令を勤めております。だけど、淳さん、すみません」

秋山「わっはっは。いってことよ、気にするな」

河東「なぜかといいますと、淳さんときよしは敵味方に分かれた設定だからです」

投球練習、形のみ。

子規「よし、だいぶ形になってきな。その調子でバシバシ投げてこい。アシががちり受け止めてやる。へなへなでも、きっちり受け止めてやる。ただしな、ど真ん中だけだぞ、へいごろう」

河東「わかってます。ノボさんが走らなくてもいいように、気をつけます」

子規「まあ。はじめからそうやって上手くいかないだろうがな。その気持ちだけでも、アシは嬉しい。さてと、淳さんはおるか？」

秋山「おう。アシはここだ」

子規「おう。そっちか。さてと、すまんが、淳さんはずっと向こうに走ってくれ」

秋山「よし、わかった。そこで止まれつてところにきたら合図してくれ」

秋山が軽く駆けていく。ときおり振り向きながら。

子規は諸手を振って合図する。

子規「よおし、そこで止まれ」

子規「ふうむ、いい塩梅だ。チーム分けを発表する。アシはキャッチャー。へいごろうはピッチャー。淳さんはさしずめセンターバグとしておこうか。この三人が味方だ。そして、きよしは申し訳ないが今回は敵ということになる。攻める方法をいまから教える。きよし、こっちに来い」

子規はきよしにバットを振らせる。

子規「腰、首、頭」

高浜「腰が回ってます。首と頭も動いてしまいませんか？」

子規「アシもわからん。あ、そうだ。遠心力という言葉も使っていたな」

高浜「ベースボールは学問ですか」

子規「ボールを打ち返すにしても、偶然の積み重ねとは誰も考えない」

高浜「偶然の積み重ねでなければ、こうしようと考えた結果、そうなる。学問と同じじゃないですか。しかし、英語を、苦手な英語を覚えるよりはるかに楽な気がします」

高浜はさまざま検討しながら、バットの素振りをする。

高浜「バットの芯でボールを捉える。腕の力ではなく、腰の回転による遠心力が大事である。スイング、スイング。アシはスイング」

河東「きよしの奴、踊りにしては滅法激しい踊りですね」

秋山「あいつだけ敵になってしまったから、怒り狂ってるんだろう」

河東「アシらだけ味方で、チームを組んでしまったから」

秋山「三対一はどう考えても不公平だ。いや、あれは案外、ノボさんの策略かもしれんぞ。仲間を呼び寄せる」

河東「あんな激しく腰を振り回して踊ったら、みんな逃げていきますよ」

秋山「それもそうだな。わっはっは」

高浜「スイング、スイング。アシのスイングが下手くそで笑われてる。英語の発音もどこかおかしい。スイング、スイング、スイング！ 笑われても、上手くなるまでスイング、スイング、スイング！」

子規「きよしは歌が上手いな。シング・ア・ソング」

秋山「おまえを笑っているんじゃないぞ。へいごろうが腰を振って踊りたいようだ。きよしの番が終わったら交代させるぞ。いいだろ、ノボさん」

子規「おう、いいだろう。順繰りにバッターをさせてやるぞ」

高浜「へいごろうも、スイング、スイング、スイング！」

河東「きよし、腰砕けになってるぞ。スイング、スイング、スイング！」

秋山「わっはっは。ベースボールは楽しいな、ノボさん」

子規「なんのなんの、まだまだ序の口だ。よおし、集合！」

秋山と河東が駆け寄ってくる。

高浜だけは機械仕掛けのように、スイング、スイング。

子規は高浜にスイングをやめるよう促し、身振りで各々の動きを伝えていく。

子規「ではここで、自らの役割を再確認しようではないか。まずはアシから。アシはキャッチャーとして、へいごろうの投げるボールを受ける」

河東「アシはピッチャーです。ノボさんに向かって、球を、ボールを投げます。ど真ん中を狙います」

高浜「アシはただひとりだけ敵チームとして、バットを振り、きよしが投げるボールを盛んに打ち返します。いま、ただひとりと言いましたが、チームは九人です。ナイン。ベースボールは敵味方ともに、九人編成で攻めと守りを交互に繰り返します」

秋山「アシは、センターバック。守りの要だ。ピッチャーからだいたい離れて後ろに立つ。打たれたらボールを追ってすぐさま走る、とにかく走る。捉えたら、すかさず送球」

子規「きよし、大事なことがひとつ抜け落ちてるぞ」

高浜「あ、忘れていました。打ったらダイヤモンドを走ること」

子規「よし、各々位置につけ」

河東の投球は定まらないが、高浜はあえなく三振。

子規「よし、交代だ。次、淳さん、打ってみろ」

秋山「アシか。棒すら振ったことがないアシが。ううん、ちょっと待て。アシもきよしと

同じくらい、スイングの練習をしないことにはどうにも格好がつかん」

秋山は高浜に教わってスイング練習。

高浜「淳さん、スイング、スイング、スイング、スイング！」

河東「淳さん、スイング、スイング、スイング、スイング！」

秋山は高浜にグローブを投げる。

秋山「きよしは、アシとチェンジだ。さっきまでアシが立っていたところで、守備につけ。

これでいいんだろ、ノボさん」

子規は喉に違和感があるのか、身振りでオーケーの合図をする。

秋山「よし、ど真ん中攻めてこい、へいごろう」

秋山は空振りを二度した後、見事に芯でボールを捉える。

河東「しまった！ きよし、追いかける。走れ、もたもたするな。白いボールを追いかけるんだ」

高浜「アシだって、走ってるぞ。如何せん、ボールが早すぎる。うわっ」

高浜は足が纏れて転ぶ。

秋山「きゃっほー。抜けた、見事に抜けたぞ。なあ、ノボさん、見たか。ありやりや、きよしの奴、ボールを完全に見失ったようだな。アシが悪いのか、ノボさん」

子規「淳さんこそ、何をポケットと突っ立ってるんだ。みっともないぞ。ダイヤモンドを走れ。ランナーとして出るんだ。そして、ホームに戻ってこい」

秋山「あ、そうか。アシも走るんだった。ホームで待ってる、ノボさん。アシが一点もぎ取ってやる」

秋山は慌ててダイヤモンドを走り出す。きよしの動きを警戒しながら。

三塁を回るころ、高浜がようやく送球。

子規がボールをキャッチ。(バウンドしてもよし)

秋山はホーム突入前に止まる。

秋山「なんや、ノボさんが仁王立ちしてるぞ」

子規「わっはっは。来いや、淳さん。よおし、へいごろう、サードを守れ」

河東「はい、ノボさん」

河東はサードにつく。

子規「突っ込んでくるか、淳さん。このままでは、どっちみち挟まれてタッチアウトだぞ」

秋山は左右を交互に睨み、やがて意を決してホーム突進。

子規「やっ！」

秋山「うわっ！」

子規「タッチ！」

ふたりが組み付いた直後、秋山は子規を左右に揺さぶるが、逆に子規のグローブでタッチされる。

河東「タッチアウトです、淳さんの負けです。ノボさんに軍配が上がりました」

秋山「なんだと。また、アシの負けか。悔しいな、正岡の大將よ！」

秋山は藻掻くが、なかなか解けない。

子規「わっはっは。ベースボールにはアンパイアという審判がおってな。まあ、今回はおらんが、審判の判断に任せられることになっている。人の生き死にも同じだろう。アシはホトトギスになってしまつて、あとどのくらい生きるんだろう」

●3場

東京 向島に旅する夏目と米山。

米山「しかし、暑い。暑くて敵わんな、夏目君」

夏目「まだまだ序の口だろ。米山君、きみはどこか、身体の具合が悪いんじゃないか」

米山「なんだい、その言い草は。夏目君は、ぼくが大層な病気にかかつていて、いつ倒れてもおかしくない、いや、手っ取り早く言えば、いつ死んでもおかしくない、そう思ってるんじゃないだろうな」

夏目「まさか、いくらなんでもひどすぎる冗談だ。それに、米山君はまだ若い。きみに相応しいことばはもつといっぱいある。さらに言い足すのなら、口を慎みやがれ、べ

らんめえ、こう注意したいんだが、どうだろう？」

米山は親友の剣幕に驚き、距離をおいた。戦う姿勢をとるも、すぐに解いた。

米山「これは、大いに失礼した。夏目君の友人が、ええっと、名前は何と言ったか、血を吐いた、とは勿論ぼくも聞き及んでいる」

夏目「ほう、一体誰から聞いたんだい？」

米山「あ、夏目君、きみからだ。許してくれ。この通り」

米山は頭を下げる。

夏目「夏の、茹だるような暑さのせいにはしないと、ぼくは好きだ」

米山「夏目君はこう言った。優秀な友人が、苦しんでいるんだと」

夏目「友人、ああ、いや、まだ見知っているだけ、とても曖昧な間柄かもしれない。正岡君だ。ぼくたちと同じく、帝国大学に入る予定なんだが」

米山「ほう、同じく帝国大学に。正岡君か」

夏目「そう、その正岡君が、自分がホトトギスになってしまったと、明るい笑顔を見せるんだ。何がそんなに可笑しいのか、とにかく夢中でね。笑いながらベースボールに興じてるんだ」

米山「おいおい、血を吐いたんだろ。ベースボールなんて激しいスポーツは土台無理な話じゃないか」

夏目「え！？ 米山君はベースボールを知っているのか」

混乱する夏目を前に、米山は守備やバッティング、走塁、捕球から送球の動きを一通り披露して、相手の度肝を抜く。

米山「その両目を見開いて、よおく見やがれ」

夏目「あ、それは、ホトトギス君には無理だ。まるで目茶苦茶だ」

米山「夏目君の江戸っ子らしい、べらんめえ口調は、正岡君に通用したのか？」

夏目「たまげていたよ」

米山「なんだって？ たまげるって？」

夏目「わっはっは。驚くという意味らしいね。正岡君のふるさと、伊予ではみんな使うんじゃないだろうか。わたしはてつきり、タマを蹴るのかと。うん、さぞかし痛いだろうね、と真面目に返したら、それこそ、たまげていたよ」

米山「わっはっは。それは、たまげるだろうな」

夏目「不思議だね、ホトトギスになってしまった正岡君を悲しんでいたのに、いつの間にか彼のことで大笑いしているんだから」

米山「完璧に思い出したよ。あの、うなぎの話に出てくる男だろ」

夏目「完璧っていうのはきみのような秀才に向ける言葉だとずっと思っていたんだ」

米山「ぼくはこの暑さに負ける。弱い身体はともじやないが、完璧なんて呼べない」

夏目「ほんとうに死ぬんじゃないだろうな」

米山「夏目君、きみも知っている通り、弱い人間はなかなか死なないんだ」

夏目「それは何かのおまじないか」

米山「きみと、そしてぼくの友人にもなりそうな男のために、ぼくたちが精一杯してやれるおまじないだ」

夏目「正岡君は完璧だ、完璧なくらい、ぼくの頭のなかにいる。こうして離れていようが、彼の頭の良さと、馬鹿さ加減はいつまでも消えない」

米山「おまじないも消えない。それこそ完璧じゃないか。美味しい思いはするけど、うなぎは人間のお腹の中へと消えていく」

夏目「正岡君が大食いなのはいままでこそ有名だが、そのとき目の前には小柄な男が立っていたんだ。ああ、そうだ。落語を聞いた後で、胸がいっぱいだった」

米山「夏目君は、胸がいっぱいになると食べられなくなる」

夏目「突然、耳もとで、癖のある訛りことばが、グワーンと響いたんだ。腹が減らないか、と袖を掴まれた。黒い顔で、目と歯が異様に白かった。男の笑顔、しかも商売用ではない笑顔にぼくははじめて出会った」

米山「そいつは子どもじゃなかったのかね」

夏目「いや、完璧なまでに成人男性の笑顔だ。正岡君のキラキラした眼に吸い込まれてしまった。それしか考えられない」

米山「男の眼つて、そんなにキラキラしているものなのか」

どちらからともなく、互いの眼を覗き込む。次第に不自然な体勢になりながら。じっくり見つめ合つては、吐き気を催すこともある。

米山「うつぶ。不味い」

夏目「あつぶ。アップルパイなら食べられる」

米山「わっはっは。きみは不利な状況にいても常に英語を口走る」

夏目「アップルパイは聞き分けの良い子だけが食べられるんだ」

米山「よし、おとなしく夏目君の話を聞こう」

夏目「注文したうなぎが並ぶと、正岡君は、ごちそうさま、と言うんだ。ぼくは、いただきます、の間違いではないかと言ったんだが、頑として聞き入れない」

米山「夏目君の奢りならわかる気もする。はじめから、ご馳走になれると期待してたんじゃないか」

夏目「あんなキラキラした眼の男が、そんなことを考えるだろうか。ぼくが目にしたのは完璧な笑顔だった」

米山「参ったな。いわゆる蔑みの激しい男だと思って捨ててくれ」

夏目「いよいよ暑さに負けて死ぬっていうのか」

米山「夏目君ほどの秀才なら、理解し合えると信じていたんだが」

夏目「おいおい、一体どういう相談だ、それは」

米山「見た目で選んだり、切り捨てたり、そんな時代じゃない。明治も既に二十年経っているんだ」

夏目「随分とまた哲学的だ。旅には全く似合わないね。旅の空気を少しは身体に取り込ん
だらどうなんだ」

米山「そう、それだよ、夏目君」

夏目「なんだって？」

米山「ぼくが正岡君を羨ましいと思ったのは、その見事なまでの食べっぷりなんだ、ぼく
の胃袋がとつても小さく、弱いことは知ってるだろう」

夏目「ああ、なるほど、胃袋を比べていたのか。正岡君はまさしく大食いチャンピオンだ」

米山「ぼくの分まで、平然とした態度で食べるんだだろうな」

夏目「ああ、今度会いに行こう」

米山「え、東京に戻っているのかね？ 大学はどうする気なんだ、正岡君は」

夏目「大学のことも、彼の思いを聞いてみるべきだ」

米山「だったら一刻も早く。そうだ、こんな旅をしている場合じゃないぞ」

米山は踵を返し、戻ろうと夏目を無理に引っ張る。

しかし、体力では夏目に適わない。なだめすかし、腹を立て、座り込み、ひとりで帰る。

夏目「まあ、待てよ。おい、待て待て、待てたら。ぼくは、たったいま、きみを騙し
たんだ。すまない、この通り謝る」

米山「なんだって？ 秀才の嘘は見抜けない、全くミステリーだ」

夏目「ぼくは正岡君を元気づけるために、この旅をしている。だから、きみも一緒に行く
義務がある」

米山「夏目君は英文科、正岡君は国文科。きみたちは、哲学専攻のぼくには到底持ち得な
い物語の素質があるからね。それで、夏目君。この旅にはどんな物語が隠されてい
るんだったか、ひとつぼくにも教えてくれないか」

夏目「ある女性を探しに行くと言ったら、きみは怒って帰ってしまう、なんてことはない
だろうか」

米山「いや、帰ったりはしないさ。むしろ面白がってついていく。男って、結局はそうい
うものだろ」

夏目「面白がっては困る」

米山「誰が関係する女性なんだ？」

夏目「大食いの大將さ」

米山「なんだって！ あの正岡君に關係する女性か。そうか、恋する人か。そうか。いや、
やっぱりやめようじゃないか」

米山はふたたび踵を返す。

夏目「おい、おい。いったいどうしたっていうんだ」

米山「うるさい、うるさいぞ、夏目君」

夏目「そんなにあのキラキラした太陽が憎いのか」

米山「憎いだって？ 憎さより強い感情があるだろう、人間には」

夏目「哲学的にという意味なのか？」

米山「いや、違うな。むしろ文学的にだろう。わたしはあなたが好きです、これを英語でどう表現するんだったかな」

夏目「オッホン！（咳払い）」

米山「恥ずかしがることはないだろう。男の前では無理なら、ぼくは消える。さあ、消えた。思う存分に好きな女性像を目の前に立てるがいい。さあ、さあ、表現してくれ」

夏目「わかっているくせに」

米山「うる覚えなんだ。発音も褒められたものではない。さあ、さあ、英語の表現を教えしてくれ。好きな人に対する感情表現を」

夏目「アイ ラブ ユー」

米山「もっと大きな声で」

夏目「なにくそ。アイ ラブ ユー！ どうだ、参ったか」

米山は夏目に対し最敬礼。

米山「参ったよ。ほんとうに素晴らしかった」

夏目「米山君」

米山「ぼくもきみも若い。しかも独り身だ」

夏目「それがどうかしたのかい」

米山「おいおい、何を寝ぼけているんだ。きみは恋する女性に対する欲望がないのか。ぼくは、あると見た。それでいいよな？」

夏目はとてもきれいな仕草で頷く。

米山「自分の恋に忙しい。そして、いささか疲れてもいる。ぼくは、しょっちゅう女性に振られてる。今日まで生きてきて、いったい何人から断りの返事を受け取ったか覚えていないくらいだ。そのうちのいくつかは、夏目君にも話している」

夏目は憐れみと遠慮深さで首肯する。

米山は夏目を指さし、

米山「きみだって同じだ。人に威張れたものじゃない」

夏目「まったく、そのとおりだ。ちよつと前に痛い思いをした」

米山「そんな、自分のことすらままならないぼくたちが、他所の男の恋情、愛情にどんな世話を焼くつていうのか」

夏目「待ってくれ。きみの頭のながさが、ぼくにはわからない。たとえ自分の恋が忙しくても、他所の世話は焼けるだろう」

米山「夏目君は人がよすぎるんじゃないのか」

夏目「ああ、そうか。これならわかる。なるほど、筋が通っている。きみは正岡君に嫉妬しているんだ」

米山「なんだって？」

夏目「確かに、若くて、独り身で、恋すら上手くいってない。先行きは不安だらけだ。だからといって引つ込むことはないさ。大いに出張って、大いに疲れるべきだ。そう簡単に死にやしないさ」

米山「心はどうだ？ そう、心は幾度か死んだ」

夏目「哲学で死んだだけさ。物語では、心は生きてピンピンしている」

米山「ああ、デリカシーのない奴め。無駄だ、無駄。ぼくは女性を好きになることに疲れてる。ノイローゼになる寸前だ。開いた傷口はもう見たくない」

夏目「正岡君は、ある女性に恋をしたけれど、まだ破れてはいない事実を報告する。疲れてはいるだろうが、まだ傷口は開いていない」

米山「きみはいつたいその恋を、彼の、アイ ラブ ユーをどうしようというんだ」

夏目「男の泣き声を聞いたことがあるか」

米山「え？ 犬や猫か。それともカラスか」

夏目「いや、人間の男の泣き声だ。断っておくが、赤ん坊ではないぞ」

米山「それなら、叱られた子どもだろう」

夏目「いや、立派な成人男性だった」

米山「急に腹でも痛み出して、額に脂汗が浮かぶほど苦しかったんだろう。なぞなぞ遊びは、もうやめにしないか」

夏目は考えこむ。

夏目「ぼくは正岡君に、破れた恋でぱっかり開いた傷口をすぐ傍で見られてしまったことがある」

米山「大将らしく、応援と励ましの嵐が吹きまくったか」

夏目「普通の男ならそうするんだね？」

米山「ぼくはそんな野暮はしない。無言で通り過ぎる。傷ついた男は背中わかる。近寄ってはいけない」

夏目「ぼくを相手に演じてくれないか」

夏目は恋に破れて傷ついた男に扮し、米山は見て見ぬ振りの男を演じる。

米山「納得いかないのか。どうせぼくは哲学的なんだろ」

夏目「違うんだ。きみはなにも悪くない」

米山「ああ、そうかいそうかい。安心したよ」

夏目「次は交代してくれ。役をチェンジだ。今度は米山君が恋に破れて傷ついた男だ。そこへ正岡君が通りかかる。彼の役はぼくが演じよう。下手でも勘弁してくれ」

米山は恋に破れて傷ついた男に扮し、夏目は通りかかる男を演じるのだが。様子が多少異なる。馴れ馴れしさから楽しげに。

夏目「なんだ、夏目君じゃないか。金之助君。大泥棒になれない顔だ。名前に金の一字を入れた甲斐があつて、大泥棒になる人生を免れたじゃないか」

米山「うるさいな。今日は放っておいてくれ」

夏目「アシが聴いてあげよう。こうやって座り込んで。さあ、哀しさを話してくれ」

米山は打ち合わせと違った成り行きに不安と不満で、そわそわはし始める。

米山「ちょっと違うじゃないか。これはアドリブなのか」

夏目「悪い悪い。とにかく、ぼくになりきるんだ」

米山「わかった。大泥棒になる人生を免れた夏目金之助、失恋で絶望の淵に座ってる。あの人は、ぼくとはもう会わないと言うんだ」

夏目「会えなかったら付き合うことはできんな。会えなかったら、結婚も難しいな」

米山「頼むからひとりにしてくれ。いまから泣くんぞ。もう、向こうへ消えてくれ」

夏目「オオーン、オオーン（泣き声）」

米山「な、なんだ？」

夏目「オオーン、オオーン」

夏目は激しく泣く。

米山「男が泣いてる。男が人の振られた話で泣いてる。うわああ」

米山は逃げようとするが、腰が抜けてしまった。這いずり回る。

夏目「待て。夏目君、なぜ逃げる。オオーン、オオーン。夏目君の話を聴いたら、無性にこう泣けてきてどうしようもないんだ。オオーン、オオーン。人は哀しいなあ。人を好きになったら、もっと哀しいなあ。アシはこの胸がひとつでは足りない気がしてくる」

米山「胸がひとつでは足りない。！ そうだ。それはぼくにもわかる」

夏目「それなら、アシの胸を貸そう。！ いや、駄目だ。アシは、この胸だけでも足りないと言ったばかりだった」

米山「正岡くん、きみはなんのためにそうやってぼくのこと泣いたりするんだろう」

夏目「いつも澄まし顔の、あの夏目君があんまりにもボロボロで。オオーン、オオーン」

泣きっぷりに辟易する米山。ついに本音が出る。

米山「男同士で気持ち悪いんだが。それに周りの目ってものがあるだろ」

夏目「オオーン、オオーン」

米山「もしかして、わざとやってるのか」

夏目「オオーン、オオーン」

米山「勝手にしやがれ」

夏目はシクシク泣く。

米山「そうか。正岡君には男同士とか女同士とか、そういった概念はないんだな。人が哀しければ、己も哀しい。きつと、心が見えるんだろう」

夏目「オオーン、オオーン」

向こうから若い女がふたりの様子を怪訝そうに窺っている。

おろく「もし。もしよろしければ、お休みになりませんか。餅と団子をご用意できます。もし、泣き疲れて、お腹が空いていらっしやるのなら、お立ち寄りください」

米山と夏目は驚きと恥ずかしさで、大いに狼狽える。

おろく「オオーン、オオーン。そうやって、まだ泣きますか」

米山「泣き疲れてしまいました。この辺で、降参します」

おろく「お休みどころがごさいます。すぐ傍です。長命寺は、桜もち屋でお休みください」

夏目「あなたは、桜もち屋の看板娘、おろくさんではありませんか」

おろく「はい、おろくは、わたくしですが」

夏目「ああ、よかった。あなたのお店を探してたんす。とびきり美味しい餅を食べたくて」
おろく「あ、はい！ どうぞお越しください。お母さん、お客様お連れします。お二人様、

どうぞお休みください」

● 4場

愛媛 正岡宅。

八重「律。律がいるなら、郵便を受け取っておくれ」

律「はい、お母さん。ただいま、わたしがやります」

律は郵便を受け取り、宛名を確認する。そそくさと八重のもとへ。

律「お母さん。ノボさん宛です。東京から」

八重「東京から？ ノボさんに？ ノボさんを変に刺激しないものなら考えなくもないけれど。

れど。それだけでなく日々騒いでいるんだから」

律「嫌な予感はないんです。ただ、変な胸騒ぎがするだけ」

八重「ううん。律の判断に任せる。大丈夫、安心だと思ったら渡してあげなさい」

律「お母さん。そんな、子どもみたいな扱いで」

八重「ええ、子どもですよ。ノボさんはわたしの子ども」

八重は去り、子規がやってくる。すれ違いざまに、睨みの応酬。

子規「おおい、律。さきほどの郵便はアシ宛と違っただろうか」

律「あ、はい。ええと、どうだったかしら」

子規「どうだったかしら？ これはまた変わった返事があるものだ。アシはなあ、律よ。東京にいる、知り合い、友だち、人生の先輩方からの連絡をいまかいまかと待ち望んでいることは知ってるだろう」

律「一旦お母さんに預けたんです。その後で振り分けてくださるでしょうから、ノボさんはゆっくりお待ちになって」

子規「いや、それには及ばん。アシがこの目で確かめたい」

律「あ、待ってください。そんな乱暴な」

子規「あ、これはすまなかつた。え？ そんな乱暴なことはしておらんぞ。ん？ 律。おまえは手に何か隠し持ってるな。どうして、諸手を後ろに回してる。さらに言えば、さきほどすれ違った母上どのは、何かを持っている様子ではなかつた。さて、これは如何に」

律「申しわけありません、ノボさん」

律は両手を前に差し出し、頭を下げる。

子規「いいんだ、いいんだ。手紙さえ無事に届けばなんの問題もない。では、アシは忙しいんで失礼する」

子規は一旦自室へ。それからほどなく血相を変えて飛び出てくる。

子規「おお、おお。これはいったいどうしたことだ。ガクガク、ブルブル。ガクガク、ブルブル。手が、身体が震えて、きちんと持てない。アシは、アシはどうかしてしまっただろうか」

律「大丈夫ですか、ノボさん。ノボさん、しっかりしてください。お母さん。お母さん」

子規「いや、律よ、騒ぐな。母上どの手をわずらわせることは何もない」

律「で、でも、ノボさんの身体が、全身が絶え間なく震えています」

子規「律がアシの話を聴いてくれればそれでいい。全身の震えは、アシの体内に赤い、そして熱い血潮が流れているからだ。頬を濡らす涙と同じ理屈なんだ」

律「わ、わかりました。とにかく落ち着いてください、ノボさん。ノボさんは、ホトトギスになってしまったんですから」

子規「ホトトギスになってしまった、か。いいこと言うなあ、律よ。おまえは、アシの大事な理解者だとつくづく思う」

律「きつと、大事な人からの手紙なんですね。ノボさんの俳句に関係する方ですか」

子規「いや、俳句にはあまり関係しない。しかし何故、そう思ったのか」

律「俳句の集まりに使ったのでは、そう推測したのです」

子規「推測！ いやいやいや、推測はしなくてもよろしい。なあ、律。人の手紙を勝手に読んだりしては失礼ではないか」

律「読んだりしていません。差出人の住所氏名です。長命寺、桜もち屋、とありますね」

子規「桜もち屋では、集まっていない」

律「女の人ですな」

子規「アシが七草（ななくさ）という文集制作したことを覚えているだろう。そのとき籠もりきりで文章を捻り出すために泊まった宿だと告白すればいいのか」

律は辞儀をして出ていく。

子規「やれやれ。女は怖いな。いやはや、それでいて最大の理解者だ」

子規が封を切ると、おろくの母親が出てきて手紙の文面を口述する。

おろくの母「正岡様、先年は一月近くに亘り長き逗留いただきありがとうございます。

何やら書き物に集中される学士様とのことで、たいしたお構いもできませんで失礼いたしました。お食事とお茶の入れ替え、床の準備と部屋の清掃など、娘のおろくに、くれぐれも粗相がないよう申しつけたのですが、いかがでしたか」

子規「ああ、眺めは最高でありました。いやいや、アシは学士ではありません。これから大学に入る予定の身分でした。書き物はおかげさまで大層はかどりました。静かな部屋を整えていただき、食事も大変美味しく頂戴いたしました」

子規は恐縮して真実を語るが、おろくの母は手紙故に淡々としたもの。どちらも感情はこもっているが、別物である。

おろくの母「娘は、お茶をお運びした折に、不躰にもどんなものをお書きになっただけかと訊ねたそう。七草、という題名の文集制作だと、こだわりなく教えてくれたとか。七つの内容はうる覚えでした。とてもとても、記憶などできるものではありません。俳句、短歌、漢詩、小説、後はなんでございましたか。さらに、娘は、完成したらぜひ読ませてほしい、そうお願いしたとか」

子規「あ、そうでした。アシもすっかり忘れていました。実は、真つ先に読ませたい人がいたのです。アシの大事な友人、夏目金之助君です」

おろくの母「娘が読んだとしても理解できるのかどうか。ところが娘は読んで感じるだけで充分だと。学士の貴方様がそう仰ったと頑張るのです。見たまま、感じたまま写し取る。写生だと仰ったそうですな」

子規「そうです。誰でもつくられる文章なのです。自分の感覚がそこに表れるのです」

おろくの母「こちらの景色が大層気に入ったと褒めてくださったと、目をキラキラ輝かせて、娘が話すものですから、わたしもついつい吸い込まれてしまいます」

子規「向島はほんとうに美しいですな」

おろくの母「母親としては、学士の貴方様に、ぜひとも娘のおろくを東京見物に連れ出してほしいと切に願うのです」

子規「え？ オロオロ、オロオロ、オロオロ」

オロオロが止まらない子規。

おろくの母「娘のおろくのこと、真剣に考えていただきたく。わたしもオロオロ、オロオ

ロ、オロオロ」

子規「素敵な人です」

オロオロが止まらないおろくの母。

子規「きれいな人だと、アシは目を丸くした」

おろくの母「娘のおろくのほうがまだしつかりしています。恋というのは、思うというのは、夜空に光るあの小さな星へとまっすぐ導かれるものなんでしょうか。き

つちり定まった目線で歩く姿は少しも揺るがないのですから」

子規「アシはホトトギスになってしまった。真っ赤な血を吐いて、ホトトギスになってしまった。アシはあなたを思うと、オロオロ、オロオロ、オロオロ」

オロオロが止まらない子規。

オロオロが止まらないおろくの母。

おろくの母「娘のおろくに叱られてしまうのです。オロオロ、オロオロするから、わたしの名前が、おろくなんじゃないと」

子規「あっはっは。オロオロ、オロオロするから、おろくさんか。いや、そうではないときつちり否定している。見たまま、感じたまま、面白い文章じゃないか、おろくさん」

おろくの母「向島は景色のよいところです。また近いうちに、旅にお出でくださることを心待ちしております」

子規「いやはや、参った」

苦悩する子規と、じっと見つめるおろくの母。
ややして、律が様子を見に来る。

律「ノボさん！ どうしたんですか、ノボさん」

ガバツと起き上がる子規。

子規「うーん。アシは眠っていたのか。うわ、な、なんだ、律か。脅かすな」

律「読む声が途絶えて、あんまり静かだったので」

子規「死んでると思ったか。アシが昏睡状態に陥ってると思ったか」

律「ち、違います！ それは絶対に有り得ないことです。そんなことになったら、たとえ

嘘でも、キーキー、悔しくてわたしは、わたしは」

子規「キーキー怒るな。アシはこの通り、ピンピンしておるわ」

律「それはよかったですね」

子規「生きてるとわかった途端に、素っ気ない声に変わったな」

律「！」

律は一礼して、出ていこうとする。

律「お邪魔しました」

子規「あ、待て。待ってくれ、律。アシは」

律「アシは、どうしたんですか」

子規「アシは、震えた」

律「え？ お身体の具合が」

子規「そうじゃない。アシは見たまま、感じたまま、写生が上達したようだ。アシは、たつたいま東京に旅していたぞ。この手紙の送り主に会ったような気分だ」

律「ノボさんは、東京まで旅していたんですか。とても描写力の高いお手紙、文章だったのですね」

子規「ああ、手紙さまさま。おかげさまでございました。そこでだ、律。アシは快復したらふたたび東京に行こうと思っている」

律「そ、それは、ノボさんが決めることですから。ノボさんは、周りが何と言おうと聞かない人ですから」

子規「アシはホトトギスになってしまったが、そう悪いことばかりでもないようだ」

律「それはどんなことですか」

子規「鳥の羽、翼をもらったのかもしれない。その翼で自由に飛び回っている。旅がもつと自由になった気分だ。これなら、アシの身体にも負担が掛からない」

律「ふたたび東京に行くというのは、そういう意味なんですね。わたしは賛成です。きっと、お母さんも賛成だと思います」

子規「あ、いや。まあ、そういうことだな」

律「不満ですか、わたしの物事の捉え方が」

子規「心は自由、思うは自由、翼は自由だ。いいか、律。アシは行きたいところへ行くだけではない。会いたい人に会うために行動するぞ」

律「会いたい人に会う」

子規「そうだ、会いたいと思った人に会わないでどうする。それこそが人間の行動基準だろう、そうじゃないか」

律「会いたい人に会う」

玄関に來客。高浜と河東。

河東「こんにちは。ノボさんはおいでですか」

高浜「俳句の会の相談に來ました」

律が反応し、子規をうかがい見る。

律「はい、ただいま」

子規「おお。きよしとへいごろうか、上がれ上がれ。母上どの、おふたりに上げてくだされ。さあ、忙しい忙しい。会いたい人が向こうからやって来た」

律「はい。会いたい人に会う、ですね」

律は玄関へ。子規も部屋を整えてから、その後を追う。

●5場

東京 向島 長命寺 桜もち屋

米山「ぼくは、すまないがお茶だけにしてください。ちよつと失礼して横になります」

夏目「ぼくは、餅を、うーん、ひと皿だけ、いただこうかな」

おろく「かしこまりました。水で冷やした手拭いをお持ちしますか？ お連れ様が暑さで参っているご様子なので」

夏目「ああ、ありがとうございます。おい、米山君。だいぶ点数を稼いだようだ」

おろくは奥へ引つ込み、熱いお茶をふたつ、盆に載せて戻る。

夏目「やあ、ありがとうございます。そっちは、しばらく放つても大丈夫さ」

おろく「そうは見えません」

次いでよく冷やした手拭いと、桶を手にしてくる。

夏目「おろくさん、ぼくがしよう。看病と言えるかどうか甚だ怪しいが。おい、米山君、いま冷やしてやるぞ。えい、えい。むむう、えい」

米山「うわ、うわ。やめろ。やめてくれー。あっはっは。いっひっひ。ひゃーひゃー、くすぐったい、やめろー」

縁台で転がる姿に、おろくは大笑いする。

おろく「わたしに貸してください。額や首筋を冷やすだけでだいぶ違います。お連れ様は、

この団扇でゆっくりと風を送ってください。はい、お上手ですね」

米山「まったく、お上手ですね、夏目君は。点数を稼いだな、夏目君」

おろく「点数ですか」

夏目「ああ、点数です。まだ学生の身分なんです」

米山「おなじく、学生の身分なんです」

おろく「すっかりお目覚めになりましたか。ご注文のお餅がそろそろ出来たかと」

おろくは一旦引っ込み、餅の皿を盆に載せて戻る。

おろく「どうぞ」

夏目「え、ひと皿に三つも餅が載ってるんですか。おろくさん、あなたもひとつお食べなさい」

おろく「お連れ様はいかがですか」

夏目「そっちの胃袋はまるで役立たずなんだ」

米山「友だちは変わった男が多い、隣にいるのはお節介の泣き虫野郎さ。もうひとりとはとにかく大食感でね」

夏目「おい、泣き虫野郎とはひどいじゃないか」

米山「大食感は、いちいち拗ねたりしない。まずはそっちに話を持っていこうじゃないか」

夏目「大いに賛成だ」

おろく「大食感とはなんですか」

米山「大食いのことさ。見ていて気持ちのいいほどの」

夏目「大食いチャンピオン。まあ、大将っていうのはどうだろう」

おろく「大将！ へい、大将！ の大将ですか」

米山「そうです。イエス、イエス、イエス」

おろく「大食いの、へい、大将！」

米山「何か思い当たることでもありますか」

夏目「シッ、考えているときは静かに。きみも哲学の人だろう」

夏目は話す途中で、米山とふたり遠ざかる。

米山「ぼくは賑やかな哲学なんだよ。何事もデリケートすぎてはいけない」

おろく「へい、デリケートな大将！」

米山「ほらほら、呼んでるよ。さあ、あの人のもとへ戻ろう」

夏目が慌てて駆け寄ろうとするのを、米山が抑える。

米山「きみはデリケート。さしずめ、ぼくはエスコート」

おろく「お餅もつと食べませんか。営業抜きで。好奇心で」

米山「無理無理。ぼくの胃袋はまるで役立たず。さっきのことば聞いてなかったんですか」

おろく「お餅もつと食べませんか。めげずに今度はこちらの方。営業抜きで。好奇心で」

夏目「ううん。きみが手伝ってくれるなら。あるいは」

おろく「あるいは、何ですか」

夏目「彼がいてくれれば。そう。正岡君がいてくれれば、きみの願いは間違いなく叶うだろうね。状況が一変する」

おろく「状況が一変する？」

米山「チェンジ、だったかな」

おろく「確認します。その方は、ものすごく、大食いですか」

夏目「正岡の大将だったら、ものすごく、大食いだな」

おろく「お餅を五皿。団子を五皿」

夏目「え？」

米山「え？」

おろく「おわかりにならないでしょう。英語でも、哲学でも理解は及ばず。論より証拠」

夏目「え？」

米山「え？」

おろく「失礼します」

おろくは一旦引っ込み、次出てくるときは皿を九枚重ねてくる。

おろく「ご注文いただきましたお皿と合わせて、ちょうど十皿。結構な量です。中身はございせんが」

米山「諸事情で中身はないんだ」

夏目「ああ、助かった。大将がいてくれたら、何も問題はなかったんだがね。ああ、アシが全部食べる、とか何とか」

米山「にこやかな顔で言うんだよな、憎らしいほど」

夏目「実際は憎らしさがない」

米山「実際は憎らしさがない」

おろく「アシ？ 足？ あんよ？」

夏目と米山は、自分の顔をそれぞれ指さす。

米山「アシ」

夏目「足ではありません。アシです。わ・た・し、という意味で使う、アシです」

米山「アシが食べるから、すべて解決さ」

夏目「しかし、よくあんなに腹に入るもんだね」

米山「ぼくの胃袋はまるで役立たずなんだ」

おろくはふたたび奥へ引っ込み、次は餅を一皿、手にして出てくる。

夏目「え？ 注文したのか」

米山「え？ 注文したのか」

おろく「おふたり様が、どんな理由でいらしたのか、ようやくわたしにもわかりました」

夏目「そうだ、この餅を包んで正岡君への土産にしよう」

おろく「アシは餅を五皿、それから団子も五皿もらおう。遠慮せずに食べる食べる。桜も

ち屋は大層美味いと評判だ」

夏目「あ、正岡君のもの真似」

米山「あ、正岡君のもの真似。でも、偽物」

おろく「きゃっはっは。きゃっはっは」

米山「やっぱり偽物。どこで覚えたんですか」

おろく「そうです、覚えたんです」

夏目「彼は、正岡君はやはりここへ来たんですね、確かに？ 隠し立てはいけません」

米山「隠し立てすると、ためになりません」

夏目「おいおい、脅し文句じゃないか、それでは」

米山「きみはあくまでも、紳士的なんだね。ジェントルマン、だっけ？」

おろく「アシは英語が苦手ときておる。だけどいいことがある。夏目金之助君という、ものすごい英語の秀才が友だちにおる」

夏目「あ、正岡君のもの真似」

米山「あ、正岡君のもの真似。でも、本物っぽい」

おろく「夏目さんは、おふたりのどちらでしょうか」

米山「隠し立てすると、ためになりません」

夏目「はい！ ぼくが夏目金之助です」

おろく「では、米山君のおかげで、アシには哲学は無理だと覚った、の米山やすさぶろうさんは、おふたりのどちらでしょうか」

米山「はい！ ぼくが米山やすさぶろうです」

おろく「自己紹介ありがとうございます。いらっしやいましたよ、正岡さんは、確かに」

夏目「やっぱり」

米山「これで、掴んだな足跡を」

おろく「学士様も夏休みは長いのですか。一月近く逗留しているあいだ、ほとんどを部屋で過ごし、朝夕の散歩が日課でした」

米山「正岡君は学士と違う。まだ大学に在籍中だよ」

おろく「お母さんが勝手に思い込んでいたんです、偉いお方じゃないかって」

米山「偉いお方は、餅を五皿、団子も五皿、ぺろっと平らげるのか」

おろく「そっちじゃないんです。七草、という長い文集を制作しているのだと、わたしに教えてくださったからです。私も読ませてほしいとおねだりしたんですが、一番最初に読むのは、アシの友だちだとやんわり断られました」

夏目「あ、七草。それはぼくだ」

米山「夏目君のことだったのか」

おろく「わたしは子どもでしたから、図々しくも他のお願いをしました。東京の街を案内してほしかったのです。お母さんも認めてくれました。とにかく忙しい人でしたので、次の機会を心待ちする日々だったのです」

夏目「おろくさんは忘れていなかった。だけど、あなたはこの店の看板娘でもある」

おろく「看板娘の意味をご存知ですか」

夏目「あなたはとても魅力的だと思いますが」

おろくは唐突に店の前の立て看板を抱きしめる。

米山「え？ なんだって、そんな真似を？」

おろく「わたしはやっぱり、看板と一心同体なんでしょうか？」

米山「ジョークですか、それは」

おろく「たとえ愚かだとしても、大事なことに思えてしまうんです」

米山「抱くのならば人の温もりでしょ。そんな格好をしても、ジョークにしか見えないよ」

おろく「生きている限り、人にはそれぞれ役割があるって言うじゃないですか」

米山「イツツ ジョーク」

夏目「困ったね」

米山「そんなポーズを決めたって、ちっとも考えていないじゃないか」

おろく「いいんです。もう心は決まっています。お二人は、わたしを説得に来たんで

すね。しかし、それも無駄になりそうです」

夏目「そんな頑なでは、困ったね」

おろく「いいじゃありませんか。離れられない女が一人いたって」

夏目「役割が与えられると、人はおかしな強さをみせる」

米山「テコでも動かないんだな」

おろく「動くに動けません。こんなものを抱きかかえて」

米山「その役割というのは、一体何だ？」

夏目「自分はブスだからとか、経済的な理由からとか、健康の不安定とか、他人から見れ

ば、え？ そんなことでなぜ諦めるのかとなる。しかし、当人は与えられた使命に

思えるんだろう。するととんでもない強さで、役割と共に生きようとするんだ。人

への愛を見なかったこと、知らなかったことにしてしまう。しがみつくんだけ、ちよ

うどあんな風に」

米山「看板にしがみついている。あれはジョークじゃなかったのか？」

おろく「自分の役割があるわたしにとって、人を愛することはとつても贅沢品なんです」

米山「愛することが贅沢品だって？ 日本は、この国は変わっちゃまうだろうな」

夏目「ああ、百年後の日本は、確実に変わっちゃまうだろうな。人が愛を口にできなくなっ

てしまうだろうね」

米山「これを嘆かず、他に何を嘆くっていうのだ」

いつしか、おろくは看板を手放してふらり歩いている。

おろく「アシは餅を五皿、それから団子を五皿もらおうか。懐かしいですね。大食いの大

将が。あの明るい声が」

夏目「待っていただいばいいじゃないですか」

米山「アシはホトトギスになってしまった」

おろく「この、馬鹿！」

米山「いや、違うんだ。アシは自由になった。心は自由、思うは自由、翼は自由だ。そん

な声を聴いたぞ、ぼくは」

夏目「声を聴いただけって？ なんのことだかさっぱり」

おろく「アシは餅を五皿、それから団子を五皿もらおうか。あの明るい声を、わたしも反

覆しています」

夏目「反覆？ ああ、反覆学習か」

おろく「学習ではありません。会ったような気がするんです」

米山「そうだよ、会ったような気がするんだよ。いや、違うな。正岡君がぼくの目の前に立って、ニヤリと笑ったかと思うと、会いに来たぞ、と言ったんだ」

おろく「会いに来たぞ、と恩着せがましく言いました」

夏目「そうか、もうじきぼくのところにも顔を出すんだろうか。ぼくも、正岡君に言いたいことがあるんだ」

米山「土産を買っていいこうか、夏目君。大食いの大將だから、きつと、こう言うはずだ」
おろく「アシは餅を五皿、それから団子を五皿もらおうか」

米山「きつと大將は食い意地張って走ってくる。まだ嘆きも知らずに走ってくる」

●6場

東京 賃貸の正岡宅。母と妹を呼び寄せている。明治二十六年

秋山「何ですって、ノボさんが大学をやめたですって？」

八重「そりゃあ、驚くでしょうなあ。淳さん、怒り狂って雷落とすかもしれない。当人はそう言って平然と仕事場に向かいました。ほんとうにごめんなさいね、相談のひとつもなく」

秋山「仕事場って、どこですか」

八重「あら、淳さんになにひとつ報せないで。偉そうに、アシは会いたい人に会う、なんて言ったくせに」

秋山「いえ、わたくしは現在海軍に在籍しております、ずっと船の上だったものですから、仕方なかったのです」

八重「あら、淳さん。アシは、アシは、って、ノボさんと同じだったのに、いつの間にか、わたくしは現在海軍に在籍しております。うつつふ。ほんと、立派な制服姿。ちよっと触ってもいいかしら。うつつふ」

秋山「あ、どうぞ。国の、政府の支給品です。わたくしの給金では、とてもとても買えるものではありません」

八重「いい手触り。洋服屋さんはどこにあるのかしら」

秋山「さあ、わたくしが買ったものではありませんので。直しにしても、どこへ出せばいいものやら。それに、わたくしの給金などたかが知れております」

八重「ノボさんが大学を途中でやめた理由はそれ」

秋山「え？」

八重「だから、お金が大変だとわかったの。病気の費用も大きいってわかったの。アシはホトトギスになってしまった。ホトトギスの餌代はえらい掛かりますなあ、母上どの。こんな大きな家に住んでるホトトギスは幸せ者ですなあ。うつつふ」

秋山「！」

八重「泣かないで、淳さん。立派な制服姿の海軍なんだから、泣いちゃ駄目。周りがみんな笑っていると、ノボさん嬉しそうだから」

秋山「はい。う、う。わっはっは。そうか、ノボさん、お金が大変になったか」

八重「そうよ。その調子」

秋山「みんな同じです。わたくしもお金が苦しくて文学を諦めました。だけど、ノボさんには文学をつづけてほしかったなあ」

八重「それが、まだやってるのよ」

秋山「え、まだやってる？ ああ、人を集めて俳句の会ですか」

八重「あれはあれで、別。違うの。お勤め先でやってるのよ。ちゃっかりものでしょ？」

秋山「お勤め先で文学をやってる、と言いますと？」

八重「小さな新聞社なの。新聞社で文芸欄の記事を書いているの」

秋山「文芸欄、ですか。俳句とか、短歌とか、それから、ええっと」

八重「戦争があったら従軍記者として行きたいって言うの」

秋山「戦争！」

八重「なにか聞いている？ 戦争について」

秋山「いえ、わたくしは立場上、それに関して何も言えないのです。すみません、お許しください」

八重「あ、ごめんなさい。わたし、しょつ引かれちゃうのかしら」

秋山「いえ、わたくしはいま何も聞いておりませんでした。正岡さんがいま何を話したのか、よく聴き取れなかったのです。アシは餅を五皿、それから団子を五皿もらおうか、と聞こえたんです」

八重「まあ！ しょつ引かれなくて助かった。淳さん、ごめんなさい、そして、ありがとうございます」

秋山「あの男、ノボさんは、未だに大食いなんですか」

八重「お給料、足りないくらい食べます。親戚から借金してまで食べるんですけど、わたしも、律も文句は言いません。怒ったり注意したりしません」

秋山「身体にいいんでしょう。栄養がたっぷりあるんでしょう」

八重「うなぎに、スイカに、トマトに、みかん。卵に、刺身に、牛肉。お米は白米、そば、うどん」

秋山「それは豪勢だ、いや、豪快な食いっぷりだ。好きなことにお金を使い、行きたいところへ行く目標を立て、やりたいこと、文学を貫いて、会いたい人に会う。これ以上ないってくらいの人生じゃないですか」

八重「ただ、何か大事なものが欠けている、そう言うってくださるお友だちがいるのも確かなんです」

秋山「欠けている？ それは健康な身体、でしょう」

八重「そうは言いませんでしたね」

秋山「他に何かあるというんだろう。わたくしにはわかりません」

八重「言いにくそうな顔でした」
秋山「え、大事なもののなにに言いにくたって、どういうわけなんだろう。ちょっとおかしくないですか」

八重「淳さんも一度か二度は会っていると、ノボさんがカラカラと笑ってました」

秋山「ノボさんが笑って？ すると彼らのなかにわたくしも混ざり一緒だったとき、こうなりますね。一体誰なんだろう」

空き地からベースボールのかけ声がする。
グローブを手にした律が出てくる。

秋山「懐かしい音と歓声ですね」

律「ノボさんが近所の人たちに広めたんです。人を集めるのが得意でもあり、人に会うのが大好きなんです」

秋山「ノボさん、あなたに欠けてるものっていうのは、一体何なのですか」

律「え、呼びましたか」

秋山「あ、いえ、ノボさんに呼びかけたんです」

律「ノボさんですか。ノボさんに、もっともっと呼びかけてあげてください」

●7場

東京 空き地 明治二十九年

キャッチボールをする高浜と河東。

河東「ナイスボール」

高浜「よし、善い球が来た」

河東「英語を使え、きよし」

高浜「ノボさんが来ないと、どうも調子がのらん」

河東「ノボさんの英語は、どうもイマイチだ」

高浜「ノボさんの英語は発音に伊予訛りが入ってる」

河東「アシは、このベースボールも、どこが面白いのかよくわからん」

高浜「おととつと。こら、どこへ投げとるんや」

河東「すまんすまん。ナイスキャッチや、きよし」

高浜「捕れそうにない球を投げて、ナイスキャッチやないやろ」

河東「きよし、そろそろ終わりにしないか」

高浜「まだまだ。この程度はウォームアップだろ」

河東「アシはもう、バテバテ。バテってしまった」

高浜「そうか、バテったか。それなら、千本ノックの出番だな」

様子を見ていた秋山が空き地にやってくる。

秋山「千本ノックなら、わたくしが代わりにやりますか」

高浜「あ、淳さん」

河東「淳さん、制服姿が眩しい」

高浜「あ、でも、何か、淳さんらしくないな。わたくしは！ なんてやつぱり変です」

河東「コラ、きよし、失礼だぞ。わたくしは！ のどがおかしいか」

と言いながら、二人は堪えきれずに笑い出す。しかし、前へ踏み出されると直立不動。

秋山「きよし、くん。へいごろう、くん」

高浜「はい！」

河東「はい！」

秋山「人は変わっていくものです。懐かしく思えても、人は変わっていくものです。わたしは現在海軍に在籍しておりますが、ノボさんはじめ、きみたちとの友好的な関係に何ら変わりはないと思ってます」

高浜「きみたち」

河東「って、アシらのことか」

高浜「格好いいな」

河東「アシもいっぺん使ってみたいな」

秋山「それで、ノボさんはベースボールをやってますか？」

高浜「ノボさんなら、仕事が忙しくてほとんどベースボールをやめた状態です」

河東「幽霊部員ですよ、あれは」

秋山「幽霊部員？」

高浜「床に伏せているわけではなくて、出張であちこち飛び回ってるんです」

秋山「出張というと、新聞記者の仕事ですか」

河東「そうですね。先の戦争でも大陸に渡っています。わざわざ志願して。その辺がどうもアシにはわからないんです」

高浜「その帰りで、またぞろ血を吐いてます。さすがにホトトギスも静養を余儀なくされました」

河東「しかし、ホトトギスって不死身なんですか？ 淳さん」

高浜「おい、失礼だぞ」

秋山「わたくしには、ホトトギスが不死身かどうかわかりませんが、ノボさんは元気なんです。ですね？」

河東「はい。ノボさんは元気に飛び回ってます」

秋山「会いたい人に会うため」

高浜「いやあ、女性かどうかはわかりませんが」

河東「昨日、奈良から手紙が来たそうです。そのときの俳句を暗記しています。柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」

秋山「ほう、目の前に情景が見えるようだ。しかもちっとも寂しくならない。むしろ楽しみを覚えるかもしれない」

様子が異なる秋山に、河東と高浜は別の喜びを覚える。

河東「見ろ、きよし」

高浜「聞いたか、へいごろう」

河東「言葉つきが以前の淳さんに戻ってる。そこが、アシは嬉しい」

高浜「ノボさんを思い出したせいだ。淳さんはいま、俳句を通じてノボさんと会っているんだ。そんな幸せだ」

河東「アシも会いたい」

高浜「邪魔するな、そっとしておこう」

秋山「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺、か、ノボさん」

河東「そっとしておくといいつつ、食いしん坊だよな、ノボさん」

高浜「アシは来年の夏は、スイカを食べたいな」

秋山「バットはどこですか？」

河東「え？ え？」

秋山「ベースボールのバットです」

高浜「ひっ叩かれるぞ、へいごろう」

秋山「練習を中断させてしまい、すみませんでした。バテたら千本ノックの順番でしたね。

ノボさんほど上手くないが、身体作りにはなります。さあ、どちらから行きますか」

高浜と河東は意を決して、左右に散る。

河東「よし、来い！ 一本目」

高浜「淳さん、こっちもお願ひします、雨あられ」

河東「前に倒れてみせるぞ」

高浜「ど根性」

秋山「あ、やっぱりやめます。やめておきます。制服を汚してはいけません」

河東「ガクッ」

高浜「ガクッ」

そこへ律が駆けてきて、秋山に会釈。

律「ノボさんのユニホームがあります。着てくださいますか、淳さん」

秋山「ノボさんの服だとサイズが小さいでしょう。今日は見学だけにしておきます。キャ

ッチボールするのを見せてくださいませんか」

律「わたしも、ですか」

律は自然と混ざり三角形でキャッチボールをはじめめる。

秋山「ボールをキャッチする小気味のいい音、ノボさんの声が聞こえてきそうです」

秋山「ノボさんは、きみたちにはベースボールをつづけてほしかったのです。ノボさんなら、平気で半日は走り回っていたでしょうね。健康な身体を保って生きてほしいんです。ノボさんは大きなものを失ってしまったんです。それにつづいて、あれもこれも、失っていくでしょう」

律「あれもこれも、つて何ですか。ノボさんが、次に何を失おうとしているんですか」

秋山「ノボさんの大事な友だちが教えてくれるはずですよ。ノボさんの一生涯の友だちが教えてくれるはずですよ」

律「ノボさんの一生涯の友だちが」

秋山「誰を言っているのか律さんならご存知ですね？ 律さん」

律「！ はい。たぶん、あの人だと思います」

秋山「会いたい人に会う。これがノボさんの信条なら、わたくしも、また会えるでしょう」
律「会いたい人に会う。心は自由、思うは自由、翼は自由。ノボさんは自由に旅が出来るようになったと、そう言っていました」

秋山「ノボさん、あなたはそうやって奈良まで旅していたんですか。柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」

秋山と律は舞台の袖へ。

高浜と河東はキャッチボールを再開。

河東「半日だって平気で走り回るぞ」

高浜「アシも半日走り回るぞ」

河東「脱落するなよ、きよし」

高浜「アシはいっぺん墮落したが、今日を境に、また走れる気がしてきたぞ」

河東「ところで、英語は上達したか、きよし」

高浜「英語は夏目君に訊ねるのがいちばんだ、とノボさんが言ってたじゃないか」

どちらかがボールを取り損ね、追うように二人退場。

● 8場

どこかの教室、夏目は教師で中学生を相手に授業をしている。

ときおり、中学生は、子規、秋山、高浜、河東、米山、八重、律、おろく、だったりする。

子規「おう、おはよう！」

秋山「何だ、そのへっぴり腰は？」

子規「路面に張った氷で、すってんころりん、やってしまった」

米山「チツ（舌打ち） 気をつけて歩け、子どもじゃあるまいに」

子規「お、おう。おれはスポーツと英語が苦手だな。すってんころりんは、英語でなんて言うのか教えてもらおうか」

米山「チツ（舌打ち） わかるわけないだろ。アメリカでも、すってんころりん、と言ってみろ」

子規「すってんころりん。ビックリ仰天」

高浜「まあまあ、まあまあ」

秋山「そういえば、今日は朝から滅法冷えるな。新しい先生はいったいどんな格好で来るか楽しみだ」

高浜「綿入れの半纏なんかがつちり着込んでいたら、みんなで笑ってやるか」

河東「半纏先生、って冷やかすのはどうだ」

八重「図体がでかくて熊みたいだったら、毛皮先生だな」

子規「熊の毛皮だったら、脱いでもらわなければ困りますぞ、先生って、逆に叱りつけてやろうか」

おろく「わたしは嫌だ。熊みたいな大男だったら、どんな反撃されるか、考えただけで危険だもん」

高浜「おまえは馬鹿か。熊が教室の戸をガラツと開けて入ってくるか。相手も同じ人間だ。ただ、ちょっと俺たちより早く生まれただけのことや」

米山「まったくその通り。熊だの、攻撃だの、つまらない想像しかできないのか、このクラスは」

律「哲学者が呆れてますよ、みんなくだらない話をしちや駄目。ねえ、秀才」

米山「秀才って呼ぶな」

おろく「毛皮の熊も、哲学の秀才も、乱暴で大ッ嫌い」

律「それなら席替えしようか」

八重「席替え、するする。どうせなら女は女で固まろうよ。このままだと不便だし」

河東「このままだと何が不便だって？」

おろく「女同士でお話が出来ないの。こんな簡単なこともわからないの？」

河東「女同士で、何話すんだ」

おろく「決まってるでしょ、大事なことに。まったく鈍感ね」

河東「鈍感だつてさ。あつはつは（無理に笑う）」

秋山「鈍感か。そうか、男は鈍感か」

米山「どうしたっていうんだ、今度は」

秋山「うん。鈍感なら、この寒さも平気だなんて思ったんだ。普通に背広か、まさかワイシャツだけか」

米山「新しい先生のことか？ 飽きもせずに」

秋山「退屈で仕方ないんだよ、おれたちは」

米山「わかったよ、おれが何とかしてみる」

一瞬の静寂があり、拍手や口笛が起る。

米山「だから、ガタガタ席替えなんかしないでおとなしくしている」

緊張のなか、戸が開く。しかし、入って来たのは生徒だったことで白ける。

子規「何だ、どうした。こう寒いとトイレが近くて敵わん」

秋山「いいから早く座れ。そこは、教壇は先生が立つところだ」

子規「お、おう。次は英語か。新しく赴任して来た先生だな。仕掛けは出来たのか？」

秋山「単純な仕掛けはすべて外してある」

子規「バケツが落ちてきたり、黒板が倒れたりしないのか。歓迎したかったのに」

秋山「その代わりに、秀才が策を練ってある」

子規「そかそか、よしよし。よお、秀才、任せたぞ」

米山「さっさと座れ。今度こそ、ほんとうに来るぞ」

戸が開き、夏目が入るかと思いきや、さっと後方へ飛ぶ。着地に失敗し、後転する。

子規「おやおや、これまた見事な、すってんころりん」

クラス中が、どっと沸く。

子規「あ、先生。今日は何も仕掛けてません。ご安心ください」
律「ビックリ仰天」

子規「腰を痛めましたか。誰か手を貸してくれ」

高浜と河東が席を立ち、夏目を引き上げる。

夏目「ありがとう。ほんとうに助かった、ありがとう。用心すぎて失態を犯す。ぼくもここまで生きてきているいろいろあったんだ」

夏目は黒板に、夏目金之助と記す。

夏目「ぼくはこの名前の、金という一文字のおかげで大泥棒にならずにすんだ、らしい。だけど、恋とか愛とかでは、随分と痛い思いをした。一生涯の友だちを得ることが出来た。みんなに語ることは、この三つで足りる気がする」

律「夏目先生は独身ですか」

夏目「ああ、まだ当分は独り身です」

八重「好きな人、思う人はいますか」

夏目「いました。けど、破れて散りました」

おろく「破れて、散る。その直前まで命が燃えたんですね、わーい」

おろくは紙テープを投げる。夏目の頭に掛かる。

夏目「わーい、とは何ですか」

おろく「わたしたち、恋に恋する、女子を代表した気持ちです」

子規「破れて散りました。何か、桜の花みたいだな。先生はものをよく見て描いているんですね」

夏目「何をよく見ている、だって？」

子規「美しい自然風景、その辺の畑や、あぜ道、この教室にある物体。いろいろです。それらをよく見て描いていると思ったら、嬉しくなりました」

夏目「不思議だね。ぼくはきみと会ったことがあるだろうか。いや、気のせいだ。ぼくはこの土地にはじめて来たんだからね」

子規「心は自由、思うは自由、翼は自由。会いたい人に会う。旅をすればいいのです」

夏目「ますます不思議だ。そのことばにも聞き覚えがある」

律「大丈夫ですか、先生」

夏目「大丈夫だ。気分は悪くない。もう心配ない。うまく言えないが、ぼくははしゃいでいる。さあ、一旦教室の掃除をしよう」

箒を持つ生徒、ちりとりでいたずらする生徒。遊び回る生徒。

夏目「さあ、座って座って。授業をはじめよう。教科書を開いて。3ページ目の英文を訳せるものはいるかね？ 何だ、自信がないのか。それでは仕方がないから順番に当たっていくからそのつもりで。では、5番の人」

高浜「はい。ええつとー。昨日は朝から洪水になるほど大雨のなか、サーカスを見に行きました」

夏目「なぜ、朝からサーカスなんぞやっているんだろう。しかも、洪水ときている」

高浜「え？」

夏目「次は7番の人」

八重「はい。ウサギは毎日毎日、ドレスアップして駅へ向かいました」

夏目「ウサギはドレスアップの仕方がわかるんだろうか」

八重「え？」

夏目「どれもこれも、ひどい例文じゃないか。単語と、文法のことしか考えていない。気持ちが悪くてもあれば、人間はもつとまじな文章を作る。明日は無理だが、来週からもつと良質な文学を用意したいと思う。どうかね、君たちの意見は」

教室内がざわつく。

子規「考えもしなかったことゆえにざわついてますが、面白そうですな」

夏目「今日はここまでにします。残りの時間は、ぼくがさきほど問いかけた例文についてストーリーを考えてみてほしい。上手く書けたら、そうだな、団子をご馳走しよう」

子規「餅を五皿、それから団子を五皿もらおうか」

夏目「え？」

子規「冗談です。あ、先生。正しい答えのない問題ですね。心は自由、思うは自由」

米山「先生」

夏目「なんだね？」

米山「英語で、アイラブユーは、日本語にどう訳したらいいんでしょうか」

米山は黒板に大きく英文字でアイラブユーと記す。

教室内がざわつく。

夏目「まさか、わからないのかね？」

米山「気持ちが悪くてもあれば、そう思ったら、もう迷って、迷ってしまったんです」

夏目「そうだな。月がきれいですね、とでも訳しておきなさい」

米山「え？」

教室内がざわつく。

夏目「何か物足りない顔だね」

米山「あ、いえ。しかし、月がきれいですね、ですか。もう少し頭を冷やした先生と、明日の朝に話し合いたいのです」

暗転

子規「夏目先生、おはようございます」

夏目「おはよう」

子規「月がきれいですね」

黒板の英文字は消えずに残っている。

夏目「大将。そのことばは、きみがほんとうに好きな女性に言う台詞だ」

子規「あ、そうでしたな。これまた、とんだ失態を。すってんころりん」

夏目「秀才」

米山「え？」

夏目「アイラブユー、をきみならどう訳だろう」

米山「普通は、わたしはあなたを愛しています、ではないでしょうか」

夏目「ぼくは、好きな女性に対し、そんな大胆なことばを使えない。心臓がドキドキする。

それに躊躇いや気後れもやってきて、一気にぼくを押しつぶすだろう。ぼくは普通ではないんだろうか」

子規「そりゃ、そりゃ、秀才」

米山「え？」

子規「押し押し」

夏目「おいおい、呷るな呷るな。あんたは江戸っ子かい？」

米山「え？ この先生、生粋の江戸っ子だ、手ごわいぞ」

夏目「ぼくが好きな女性に面と向かって、わたしはあなたを愛しています、なんて言った日には、すってんころりん。おまけに逃げ出してしまいうだろう」

子規「上手いな先生、すってんころりん」

夏目「あなた馬鹿だね、って顔をされたよ。ぼくは実際には逃げ出しもせず、ひとりシヨボンと突っ立って、まったく以て恥ずかしかったね」

律「恥ずかしくなんかないよ、先生」

夏目「いいや、ぼくは恥ずかしいと思えてよかったんだ。相手の気持ちを考えていなかった。相手の気持ちを無視したまま、あなたを愛して一体どうなるというんだ」

おろく「自分の声で自分を叱ったんだね、先生」

夏目「月がきれいですね。一緒に見ませんか。そんな気持ちで人は近づくんだけ、好きな人の傍にね。誘い文句。モーシヨン。ことばは美しい。なぜなら、ことばを扱う人の、

気持ちが良いものだから」

律「アイラブユー。月がきれいですね」

八重「アイラブユー。月がきれいですね」

おろく「アイラブユー。月がきれいですね」

終業時刻のチャイムから暗転。

頼りない明かりの中、さまよい歩く夏目。

東京 子規庵。明治三十三年ころ

子規「痛い、痛いぞ、律。ああ、アシはもう駄目だ。アシは背中が痛くてたまらん。アシの背中に穴が開いてる。痛い、痛いぞ、律。ひー、ひー、ひー、ひー、痛い、痛いぞ、律」
律「すみません、ノボさん。堪忍してください、ノボさん。でも、包帯を替えないことには。痛いでしょうね。ごめんなさい、ノボさん」

子規「もういい、もういい。律、おまえはどこかへ嫁に行け」

八重「そんな乱暴な言い方がありますか、ノボさん。律がいないと、律、律、どこへ行つた、律、と騒ぐくせに」

律「喧嘩はやめてください、お母さん」

子規「いいや、アシが悪かった。律、すまなかった。ありがとう、律、母上どの」

戸口で、ごめんください、ごめんください、と訪問者の声が響く。

八重「はい、ただいまー」

律「どなたか楽しみでしょう。ノボさんのお客さんですよ、きつと」

子規「アシはホトトギスになってしまった。だが、会いたい人に会う、そう決めたら、まるで旅でもしているように身体が、心が自由になって。何にも不自由がなくなった」

夏目が入ってくると、途端にシヤキツと立つ子規。

夏目「やあ、正岡くん。久しぶりだね」

子規「おお、夏目君じゃないか。よく来たなあ、さ、ここへ座れ座れ。そらみろ、律。ア

シは会いたい人に会う。翼は自由。これもみんな、ホトトギスになってしまったお陰だ」

夏目「元気なホトトギスだね。ああ、お土産があるんだ。餅が五皿、それから団子を五皿、おろくさんのことはわかるだろ？」

律「夏目先生、ありがとうございます」

夏目「律さん、内緒の話だが、ぼくは今東京にはいないんだ、イギリスの町に住んでいる」

律「え？ それはビックリ仰天」

子規「ワツハツハ。律がビックリ仰天なら、アシはすってんころりん。いやあ、夏目君とはもう会えないと思ってた」

夏目「オッホン。で、おろくさんとは会えたんだろうか」

子規「いいや、アシはもう会わん。きつぱりと諦めた」

律「病気のことか、そう問いました。つまり、赤い血を吐いてホトトギスになってしまったことを言っているのです」

子規「その通り。これがアシの役割なんだ。人にはそれぞれ役割がある。一生のうちでその役割を超えて、事をなすのは贅沢品だとアシは思ってる」

夏目「大将！ そんな馬鹿な。アイラブユーが贅沢品だなんて、断じて有り得ない」

子規「そう、カリカリするな、夏目先生。生徒が恐がるぞ、わっはっは」

夏目「うるさい。生意気な生徒ばかりだ。それにぼくは、きみを思っただけで告げている。正岡の大将の恋は、まだ破れていないんだ」

子規「夏目君はなぜ、そうやって、アシの世話を焼く？」

夏目「ぼくの破れて散った恋を、オオーン、オオーンと憚りなく泣いてくれたじゃないか。

男のくせに、オオーン、オオーンと声を上げて泣いてくれたじゃないか」

子規「なんと、しまった。アシは、オロオロしたくなってきた」

夏目「オロオロして、おろくさんの名前を叫べばいい」

子規「そのおろくさんには、既に確と伝えてある」

夏目「え？ 正岡の大将、ほんとうに、おろくさんへ伝えたのか？」

子規「だから、そう言っただろう。何度もやめてくれ。アシはまたぞろ、オロオロ、オロオロが止まらない」

夏目「しかし、しかし、ぼくは知りたい。結果はどうなった？」

子規「どうもならん」

夏目「え？」

子規「だから、どうもならんよ。月がきれいですね、とアシが言うだろ。すると、おろくさんが、そうですね、月がきれいですね、と返すわけだよ、夏目君」

夏目「それはつまり、作戦成功したんだろうか」

子規「さあなあ、アシはタイミングをしくじったのかもしれない。タイミングを外して、すってんころりん」

夏目「そ、そうか。それは残念無念。ああ、そうだ、正岡の大将は、どんな方法で愛を伝えたんだろうか」

子規「知りたいか。どうしても知りたいか」

夏目「知りたい。どうしても知りたい」

子規「よし。特別に教えてあげよう。ここをな、こうやって使うんだ」

夏目「え？」

子規「こう、相手の目を見つめる」

夏目「目を見つめる」

子規「すると、相手も、アシの目を見つめてくる」

夏目「相手も、アシの目を見つめてくる」

子規「月がきれいですね」

夏目「そんな素敵な方法があったのか」

子規と夏目はグローブをはめ、キャッチボールをする。

子規「さようなら、夏目君」

夏目「さようなら、正岡君」

暗転

東京 子規庵付近で。明治三十七年、子規が亡くなって二年後。

夏目と律が道ですれ違う。

向こうでは、高浜、河東、秋山がキャッチボールをする風景。

律「あ！ 待ってください。餅を五皿、それから団子を五皿、のお方！」

律が振り返る。声と挙動で、遅れて夏目も振り向く。途端にすってんころりん。

律「夏目先生ではありませんか？」

夏目「いかにも、夏目ですが。あなたは」

律「お忘れですか。ノボさんの妹です。正岡律といいます」

夏目「ああ、正岡君の」

律「わたしにも出来ました。会いたい人に会う、ことが。ノボさんのように、心が自由になれました。見たまま、感じたままに」

夏目「あなたは旅をして、ぼくに会ったのですか。いや、そうじゃないな。ぼくが旅をして会えたのかもしれない。あの後あなたから、手紙をもらいましたね」

律の独白。

律「わたしは、あれから学校に入りました。女のくせに、です。自分の役割を見つけためでしようか。わたしは、わたしがするべきことを抱えて生きていきます」

夏目「あなたの役割は人を愛することだ」

律「わたしは二度も結婚に失敗しているんです。それは贅沢です」

夏目「それがどうしたというのですか。あなたは愛を伝えるべきだ」

律「そんな人はいません。この先も現れません」

夏目「ぼくは友だちをふたり若くして喪いました。青春の終わりです。永遠に友だちを喪うという事は。ぼくは妻に、月がきれいですねと何度も語りかけた」

律「月がきれいですね。アイラブユー」

夏目「ひとはどんなに傷ついても、誰かを愛することをやめてはいけません。他者を思うこと、それはすなわち、愛である。もっと自由に。さあ、ぼくの前で誓ってください。

正岡の大将の前でも良いんだ」

律「ノボさんが大将なら、わたしは大関」

夏目と律は道で交差し、それぞれの道を行く。

律は途中から明るく踏み出す。

律「いつかわたしも、月がきれいですね、と言えますか」

律のスキップ。

幕